



オカラ県にあるノンフォーマル小学校の授業をサポートする大橋専門家(左)

地域で教育支援に取り組んできた大橋知穂専門家。そこでパンジャブ州の識字局は10年以上にわたる「ノンフォーマル小学校」、学ぶ機会を逃した15〜35歳への「識字教室」を通じて、識字率の向上を目指してきた。

現地の人たちの努力もあり、少しずつ広がりを見せてきたノンフォーマル教育。しかし、教職の資格がなく、教えるノウハウが十分でない先生も多く、教育の質に関しては改善すべき点が多く、日本と共に。そこでこの約10年、日本と共に

「従来の教科書は、文字の説明ばかり。分かりやすく、実用性を持たせるため、日本の教材を見てもらいながらイメージを持ってもらえるように努めました。」すると、最初は識字局からの指示をただ待つだけだった現場の担当官たちも、保健衛生局や農業局など他の部署にも声を掛け、生活に役立つ知識が学べる授業づくりに取り組み始めた。

「学びの機会を得たことで、子どもたち自身ができることも増えてきた。「自分の子が電気料金の請求書が読めるようになったと、うれしそうに近所の人に自慢していた親御さんもいました。また、年上の人に対する態度が良くなったり、健康や衛生に気を付けるようになったことも大きな変化です。」と大橋専門家は話す。「医者になりたい」「先生になりたい」など将来の夢も広がり、未来を見つめる表情は生き生きとしている。

今年に入って、日本の協力で作られたノンフォーマル教育のカリキュラムが、パンジャブ州で正式に承認された。確実に根付きつつ

ある新しい教育の形は、これから全国展開される計画だ。「まずは校舎などのインフラを整備するところから、現地政府に働き掛けていく必要があります」と、JICA Aパキスタン事務所の稲垣良隆さん。小学校を卒業しても中学校が近くにないなど、上の教育過程に進むことが難しい現実があることも課題。さらに、将来のために学校での学びが就職へとつながる仕組みづくりも求められている。「誰もが自分自身で道を切り開いていく力を育める国となるように、さらに取り組みを進めていきたい」と稲垣さんは語る。

読み書きができる喜びが、未来を照らし始めたパキスタン。全ての子どもが教育を受けられる社会の実現に向けて、一步一步、歩みを進めている。

[上]成人向けの教室では、裁縫や家庭菜園など収入につながる技術も教えている
[下]パンジャブ州で多くの人が働くレンガ工場。低賃金で過酷な労働だが、学ぶ機会を得たことでみんな生き生きとしてきた



学びを通じて人生が変わった

大橋専門家が何よりも心掛けてきたこと。それは「現場主導」だ。現地の人たちに当事者意識がなければ、何をしてもうまくいかない。そこで教材作りでは、学習項目などを決める初期段階から、現地の視点で考えられる人を巻き込むことにした。「なかなか適任者が見つからず苦労しました。新しい取り組みに対する抵抗がある人も多かったようです。」

いざ作り始めてからも、一筋縄にはいかなかった。

「従来の教科書は、

「学びの機会を得たことで、

「貧しくて学費が払えず、女子教育への理解も乏しい環境の中で、全ての人が学校に行けるようになるにはまだまだ時間がかかります。だったら、学校と同じ程度の資格が得られ、生活に必要な読み書きを学べる場、つまり、ノンフォーマル教育」を充実させていこうという動きが高まってきたのです。」こう語るのは、長年この

読み書きが学べるもう一つの教育

パキスタンで最大の人口を抱えるパンジャブ州。今ここで、女性を中心に話題となっているものがある。手帳に自分の名前や誕生日、家族のことなどを書きためていく「My Book」だ。書いて、記録することは楽しい。それを多くの人が知ったのは、つい最近のことだ。

全ての子どもに教育を。2014年、史上最年少でノーベル平和賞を受賞した17歳の少女、マララ・ユスフザイさんのメッセージは、世界中の人々の心を揺さぶった。パキスタンは、学校に行けない子どもが、アフリカのナイジェリアに次いで世界で2番目に読み書きができない人はなんと約5割。マララさんはそんな状況の中でも、女の子でも学ぶ権利はあ



読み書きを学ぶ子どもたち。ノンフォーマル教育を受ける7割以上が女性といわれている

「読み書き」できる喜びを全ての人に

学校に行く機会を奪われ、生活に必要な読み書きができない。そんな人が、パキスタンにはたくさんいる。そこで約10年前から、学びの機会がない人たちへの支援を続けている日本。その成果が少しずつ実を結び始めている。



教材として使われている「My Book」。日記のような感覚で、楽しみながら書くことを学べる